飛龍隊戦記―ストライクウィッチーズ1937―

はまっち

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

１９３７年８月、ウラル方面から飛来する怪異の侵攻は激しさを増していた。

首都渝城の郊外までその侵攻を許した大漢民国は同都市防衛のため各城市に。そして各国に義勇兵の募集を行う。

目次

26—08・01

第一話　上渝水城 ―― 1
第二話　於渝城港 ―― 6
第三話　我醉欲？ ―― 10
第四話　頭髪上指 ―― 15
第五話　遠影空尽 ―― 18
第六話　早着詩城 ―― 23
第七話　巫山猿声 ―― 26
第八話　巫山弾雨 ―― 29
第九話　誰何一叫 ―― 35
第十話　上渝水城 ―― 39
第一一話　省非礼負荊 ―― 44

26—08・01
第一話　上渝水城

空にあこがれていた時が、昔はあった。
青くて高くて、どこまでも見通せそうな蒼穹も。暗くてどんよりと落ち込みそうなほどの曇天も。
紅くて広くて、遠く戴天の山を望まんばかりの夕暮れも。岷江の水かさを思い切り持ち上げる荒天も。
雪や雨で大地を潤し、だけども黒く分厚い雲で太陽を隠したり。
かと思えば雲一つない青天にお日様を浮かべて私たちをカンカンに照り付けたり、山並みの向こう側でごろごろと雷鳴を轟かせたり。
そんなくるくると移り変わる空模様が、それも含めた天空が大好きだった。
だから私は、大空を目指したんだ。
父のいない房子を守るために？　青天白日の旗を守るために？
いいや、それはきっと――――
「……おい、いい加減に起き給え」
ゆさり。大きく右肩を揺さぶられて、少女の意識はぷかりと湧き上がる。
暖かく、春の日差しの中にいるかのような安寧だけが閉じた瞼の外側から伝わる、そんな気がした。
「？不快起床（おーきーたーまーえー）、そろそろ着くぞ」
今度は複数回、連続した揺れが右肩を中心に引き起こされる。
丁度今誰かに起こされているんだろうか、少し訛りの入った言葉が耳に入っては出ていく。ぼんやりと寝ぼけた脳の中には一言たりとも入らずに、だ。
「うーん……もう少し……」
青灰色の肩を震わせて、少女はおもむろに左側を向き肩を寄せる。
泥のような眠りを妨げに来る魔の手から逃げるように、寝ぼけ半分で丸く青灰色の軍服の中で腕と腕とを寄せ合った。

はぁ、何があっても起きようとしない姿勢に業を煮やしたのか、丸まった少女の肩から暖かい手が外れる。直後、大きなため息と一緒に、すぅ。と肺のすべてまで空気をいきわたらせる音がした。
「起来吧(起きろ)!!」
耳元に息がかかるほどの距離から、怒号が響く。ゆったりとした心地よさとは無縁の声が少女の脳髄を突き刺してその瞼を有無を言わさずこじ開けた。
「わわわっ!! ――――が、高志航(ガオヂーハン)少校!? 敬礼っ!」
少女は突拍子もなくつい先ほどまでの薄い眠りから叩き起こされる。そのまま条件反射的に慌てて立ち上がったはいいものの、勢いのあまり低い天井に頭を打ち付けた。
硬い木製の屋根と黒い髪に覆われた頭頂部とが直接ぶつかり、ゴチンと火花でも散るのではないかと見まごうほどの衝撃を双方に与えた。
高(ガオ)は涙目になって床の上に蹲った彼女を一瞥すると、先ほどまでの剣幕は何処へというかのように平然と口を開く。
「おはよう、柳哲生(リウチーシエン)少尉」
柳(リウ)と呼ばれた少女――柳哲生(リウチーシエン)はあ痛たたと小さくうめきながら、竹製の座席に座る黒色の軍常服に身を包んだ女性――高志航を見上げた。
「おはよう、ございます……もう少しマシな起こし方は」
「知らんね。そもそも頭を打ったのは君が慌てすぎたからだろう」
志航はくすりと笑い、頭を抱えて床の上に蹲る哲生に立ち給えとばかりに手を差し伸べた。
ありがとうございますと目尻に涙を浮かべながらも頭を下げる。志航がうむと小さく頷いたのを見て、その厚意に甘んじることに決めた。
自分よりは数年上の、大きな右手に右手を重ね合わせる。
??(お母さん)というよりは爸爸(父上)だな、内心でぽつりと独り言ちて、将校特有の白い手袋の滑らかな感触を掌全体で感じた。
哲生はいそいそと身だしなみを整えると志航の隣に置かれた椅子

にちょこんと腰かけ、はぁと嘆息する空軍少校の横顔を恐る恐る覗く。
「全く、私よりよほど〝航海〟を楽しんでいたようだな」
「し、失礼しました！　しかし、本日はまことにお日柄もよく……」
中央航空学校の癖が抜けきっていないのか、上官の言葉にはついつい声を張って返してしまう。船室の中ではそこまでの声量が必要というわけではないのに。
ちらりと横目で見た先には燦燦と昼時の陽に照らされ、ほのかな温かみを持った書物が、木製の小さな机の上に載っている。哲生が持ち込んだ覚えのない書物――恐らく志航の持ち物なのだろうと結論付けて、彼女の返答を待った。
志航はふぅと一つ息をつくと、哲生の緊張に凝り固まった顔をしげしげと眺めてまたため息を溢す。
「まぁ……解らんでもないが、頼むから暁角の音くらいは覚えてほしいものだよ」
えへへ。したたかに打ち付けた頭を撫でながら、哲生は小さく笑った。痛みをこらえるように頬を上げ、目尻をそっと親指で拭う。
「高小……高志航少校、任地はまだでしょうか？」
少女は狭い部屋をきょろきょろと見渡し、二人分の荷物と質素な調度のみを認める。小さな体を包み込む青灰色の軍装が、殺風景な部屋にはやけに映えた。
ふむ。鼻を鳴らした志航は墨を吸ったように黒い軍常服を少しずらして、腕時計へ目をやる。
「もうすぐすぐだ」
途端、汽笛がぼぉ、と高らかに鳴いた。
一定の、ゆったりとした揺れしか返してこなかった床が。椅子が。若干の緩急をつけてその波を変える。
「わあ……！」
哲生はガラス張りの船窓に顔を張り付けるように近づけて、外の様子を窺った。

青い空に白く輝く太陽。濃緑に萌える四川の山並みのところどころに、灰色の煙花が漂う。
遠くに見えるのは四面山、目の前の山には革命の英雄が隠居しているとかいないとか。
茶色く濁った川の上を行く何艘もの小舟の上から、編み笠を被った漁夫たちがこの大きな鋼鉄の塊へ向けて。少女たちに向けて大きく手を振ってはまたもとの生業に戻っていく。
中原大陸の二大大河のひとつ、揚子江。
故郷の河川をみんな束ねて流れるこの川は、軍艦が通れるほど深く、広い。古の軍隊が渡ることができずに降伏したという話も、逆に天下分け目の決戦が行われたという話も数多く残る、まるで長大な城。
近頃、つい1ヶ月前から活発化しているという怪異の群れも、この川を超えては来ない。かつての帝王が怪異に敗北したのち、父祖は広東、四川、雲南などほんの少しの大地にこびり付くことを選んだ。その名残の、数少ない安住の地。
「機械化航空歩兵――――私はウィッチとして、きちんと戦えるんでしょうか」
少女の手に、思わず力が入る。ぎゅっと固く握りしめられた拳が青灰色の袖の下で震えた。
志航はふっと口角を緩やかに上げると、哲生の肩をポンと叩いて腰を浮かした。よっこらしょと独り言ちながら日向へ。木製のテーブルに無造作に乗せられた小さな本を手に取る。
「君が青天白日の心で戦うなら――じゃないかな」
李白と掠れた字で書かれた表紙を白い手袋越しに撫で、徐に鞄へと押し入れる。
怪異の群れからこの大漢の民を守る気概があるのなら。小さく付け足して、志航は低い天井に気を付けながら立ち上がった。
「将に『思君不見下渝州』……ってことかもわからんね」
そうしてくつくつと志航は笑った。汽笛は再び高く嘶き、旅の終点だと伝えてくる。

怪異の姿なんて見えないまま、船は渝州へ下りていく。

古の都へ。今の都へ。大漢民国という朽ち果てた龍の背に乗って。

第二話　於渝城港

汽笛が低く、しかし空の向こうまで届くほど長く長く轟き渡る。
ぼぉ――っと一際長く。
今どき石炭を使うという時代遅れの機関ががたんと止まり、窓の外を流れる雲の速度が次第にゆっくりと一定になる。
ほら着いたぞ。革製の鞄を片手にぶら下げて、志航は船室を抜け出した。その黒い背中を追って立てつけの悪さが目立つ木製の扉を開け、哲生は廊下へと足を前へ進める。
「少校！　待ってください！」
曲がりなりにも木材が見受けられた船室とは大きく異なり、廊下は狭く、暗く、おまけに蒸し暑かった。
鉄のパイプが所狭しと張り巡らされ、そのいたるところに赤い錆が浮いている。いやに埃っぽく、古寂びた空気が館内に充満しているのがよくわかる。
寄港ということで船員たちも急いているのだろう、あわただしい足音が天井から直接響いてくるようだ。
「いくら天下の扶桑製とはいえ、第一次大戦……どころか辛亥革命以前のものだからな。これくらいの老朽化は仕方がないとしてくれ」
少し先の廊下を歩く志航はふいと制帽を傾け哲生の方を振り返る。
「……ああ柳君、そこのパイプに手を触れ給えるなよ」
「えっ!?」
いきなり名を呼ばれた哲生はびくりと肩を震わせ、手すりのように体重をかけていたパイプから手を離す。壁から生えたパイプの群れの一本が瞬間、ミシリと若干嫌な音を立てた。
哲生の掌にこびり付いた赤錆がパラパラと床の上に落ち、その上に何処のパイプから漏れたのか水滴がぽたりと零れる。
いわんこっちゃないと志航は独り言ちて制帽を目深に直した。
「す、すみません！」
「……本当に何をやっているんだか」
志航は苦虫をかみつぶしたような、眉間に皺を寄せた鋭い視線で赤

錆の目立つパイプを睨む。憎々しげにちっと舌打ちした後、こつりと半長靴の底を床に打ち付けながら先を急いだ。
無骨な船の中だということをありありと見せつけるように張り出したパイプ。こつこつと一定の速度で響き続ける足音。真剣極まりない志航の横顔。
哲生の背筋に冷たいものを投げかけるにはそれだけで十分すぎる。
「……とりあえず、だ」
志航は甲板へ続く階段の前でぽつりと徐に口を開いた。
「艦長の鄭師俊中校には私から艦内の老朽化が目立っていたと伝えておく。それとなくこの場所も修理を要請しておくさ」
「え、でも……」
でも。じゃない。姿勢を正して直立した哲生の肩に白い手が載せられる。
「なに、老朽化は事実だろう？　再発防止の注意ってだけでとどめておけるさ」
任せておき給え。志航は静かにうなづくと、子供に言い含めるようにゆっくりと告げる。
「それに、鄭閥への貸しはこれだけじゃ足りないからね……君は先に渝城の飛行隊に顔を合わせて来給え。第四大隊準備隊の高と言えばわかってくれるはずだ」
それきりいうと志航は踵を返してひらひらと手を振りながら、艦長室のほうに歩いて行った。
「……ありがとうございます！」
哲生は一言呟いてその後ろ姿に頭を下げると、甲板へと足を踏み出す。
まず見えたのは、南中した太陽の目映さ。そして青い空だった。
かたや緑の生い茂る山。かたや土塀の並ぶ大きな城市。
大西王のお膝元である成都にも負けず劣らずの繁栄を見せ、その証拠とばかりか川べりに並ぶいくつもの桟橋に渡し舟が並ぶ。
雨期が終わり、土色に増水した揚子江の川幅は、広い。この軍艦が何艘あっても埋まらないくらいの幅があるように感じた。

「……ここが、渝城……」
ごくりと唾を飲み込む。私が守るのは、こんなに大きな街なのか。
ぽつり、ぽつりと責任感が湧き出してくるのを感じた。
??(それそれ)、??(よいしょ)と掛け声をかけて男たちが荷を押す。それを黄土色の軍服を着た軍人達が受け取り、舷梯の上をを行き来する。軍艦の寄港という、日常。
「おーい！」
ふと、大きな艀の上に整然と並べられた積荷と積荷の山間から呼ばれた。
見ると哲生と同じようなブルーグレーの中山服を纏った少女が手を振っている。
「今行きます！」
彼女が飛行隊の人だな。哲生は結論づけ、船員と工員達の隙間を縫って舷梯を駆け下り、渝城の港へと降り立った。
竹を編んだ行李を背負うと、先程少女が見えたあたりの位置まで歩く。半裸の男たちがコメや弾薬でも詰まっているのか、大きな木箱を軍人のもとへと運んでいくのが見えた。
鉄道も隣接しているのか、石炭の煙が空にたなびく。大漢民国の首都というのは過言ではないようだ。
ここら辺だと思うんだけど。軍靴をこつこつと鳴らしながら歩いていると、がたり。突然木箱の山が揺れた。
哲生は咄嗟のことに肩を跳ね上げながらも、人の気配にほっと胸をなで下ろして告げる。
「あの、第四大隊準備隊の高……です！　あなたは渝城の飛行隊の方……なんですか？」
数秒の間隙を挟んで、木箱と木箱の山の間から黒髪の大漢人の少女が現れた。
扶桑陸軍のヘルメットではあるもののその軍服は大漢民国の中山服。色も哲生と近しい青灰色で、若干釣り上がった目尻に同じ民族の匂いがする。
「ようこそ渝城へ！　歓迎しますよ高志航少校殿!!」

「えっ？　あ、あの。私は……」
高志航少校ではなく柳哲生少尉だ。その言葉を言おうとした瞬間、意識を離していた右手を掴まれた。
「皆まで言わずともいいんですよ少校殿ぉ。機械化航空歩兵なら誰だって知ってます」
少女は突然の出来事に困惑する哲生の右手を同じ右手で握り締めると、無理やり握手の体にする。
ああ、自己紹介が遅れましたね。少女は扶桑式の網のような模様が目立つヘルメットに指をあわせ、敬礼。
「大漢民国空軍第四大隊〝準備隊〟所属、楽以純（ユエイーチュン）少尉であります！」
楽（ユエ）と名乗ったそのウィッチは、静かに薄く口角を上げた。

第三話　我醉欲？

「……まだ、ですか」

弱々しく、土気色の顔を下に向けながら、哲生は尋ねた。

激しく上下する視界に移る世界は、皆灰色っぽく味気なく見える。

思うに景色を楽しむ余裕がなくなるんだろう。眼窩の奥から喉にかけて、酔っ払ったときのような吐き気に襲われながら結論付けた。

「もう少しですよ」

以純の握るハンドルがぐるりと回され、それと共に進行方向が左へと変わった。

轍の後を越えたことで大きく車体が揺れ、視界を左右に揺さぶる。

哲生は倦怠感から逃れるためにか、すぅ。と大きく息を吸い込んだ。その瞬間から、真新しい酸素が肺腑を通じて入れ替わる。

頭の片隅におかれていた気持ち悪さ、不快感が幾分か薄れ、またむかむかと鳩尾の下の方から湧き出てきた。

はぁ。大きく息を吐いて、また狭い窓の外に空気を求めるように顔を出す。

ガタガタと小刻みに揺れる車体、酩酊する三半規管にまた、厭な気持ち悪さがこみ上げてきた。それを全て洗い流すかのように息をまた吸い込み、吐き出して、また吸う。

心臓や肝臓に次いで重要な肺を無理矢理働かせて機能させているというところに一抹の不安を覚えながらも、吐いた息と入れ替えるようまた大きく息を吸うしかない。

ウィッチの間では、いやこの国の主要な信仰である道教においては、この肺腑こそが気、西欧諸国の言うところのエーテルを司っているという。哲生の故郷である四川にも当然のように道観が立ち並んでおり、昆明に居たときだって試験前にはよく武候に祈ったものだ。

「……車酔いって、誰に祈れば良いんだろ……」

哲生はポツリと元気なく呟いた。

ガタンと大きくまた車が跳ね、小さくではあるが腰が浮く。

前の運転席に座る以純は「李白か張益徳にでも祈れば良いんじゃな

いですか」と一嚊し、より強くアクセルを踏んだ。
「楽少尉、その……」
「なんですか少校殿ぉ！　この楽に何だって聞いて下さい!!」
リベリオン製らしい、無骨っぽくてそれでも優美な曲線を持った車が轍の後を飛び越える。
舗装なんてされていない、泥濘んでガタガタの不整地をタイヤが空転してサスペンションを存分すぎるほどに機能させる。着地の衝撃で息を喉に詰まらせながら、哲生は辛うじて言葉を口にした。
「いや、ちがっ……運転、荒くないですかっ……!?」
「普段はこれに猛暑まで出てくるからマシな方ですよ！」
ははは と以純は笑い、ここから峠になりますよと呟いた。途端にガタンと大きな音を立てて上り坂をのぼり始める。
峠、とは言ったものの、山間の町と言った方が良かったのかも知れない。土塀の立ち並ぶ家々は変わらずに道に沿い続けていた。
「楽少尉……ええと、何期でしょう？」
下り坂にさしかかったところで、哲生は以純に訊ねる。
見た感じ自分と変わらない背丈だったというのもあるが、同じ少尉ということは中央航空学校出だと思ったからだ。
スピードが出すぎないようにブレーキを踏みながら以純は気軽に答える。
「昆明の中央航空学校のことでしょうか！　もしそうならば自分は三期です！」
私より2期も上じゃないか。哲生は内心歯噛みした。
これで同期ならまだしも、2期上の先輩相手に敬語で話されるとはむずがゆくて仕方が無い。
「りゃ、了解。ええと、その」
「そういえば、少校殿のストライカーユニットはどのように輸送されるのでしょうか？」
車が水平に戻り、そのまま走ってすぐの四辻でいったん止まった。
「そういえばそうですね……」
昆明から別口で輸送してくるんだろうか。ふと疑問に感じる。

「自分が広東に赴任した時は寧海……ああ、今の海軍の旗艦です。その船に載せてきていましたね」
「そんな船があるんですね……扶桑の空母みたいに大きいんですか？」
いえ、違います。以純はハンドルを強く握り直して、前を睨んだ。
大きな編み笠を背中に背負った数多くの軍人達が、口が裂けても整然とは言えない隊列を組んで歩いて行く。
擦り切れた青い軍服を纏い、小銃を腕に固持して足を進めていく。
四辻の真ん中で倒れた青灰色の軍人のもとへ士官が歩いてきて、木の棒でこれを叩きのめした。
黒い軍服を着た士官から殴る蹴るの暴行を受けた兵士は、フラフラと立ち上がるとまた隊列へ戻る。
隊列の最後尾を歩く先程とはまた別の士官がぺこりと車に向かって頭を下げた。
はあ。以純は小さくため息をついて、口を開いた。
「空母なんて大きなものじゃありません。……小さな軍艦の上から火薬式カタパルトで射出するんです」
飛ぶときが少し痛いですけど、大したことないです。えへへと以純は笑い、アクセルを踏んだ。
「さ、この峠を越えたらもう着きますよ」
そう言って車は2つ目の峠をのぼり始める。
「……さっきの船にも、カタパルトってあったのかな」
ポツリと呟いた哲生に、ガタガタと車体がまた揺さぶりをかけていった。
次第に車窓から見える景色も木々が多くなるが、峠の頂点を境にしてまた家々が多くなってくる。
ふとみると、影が車の上を通り抜けるようにして飛んでいった。
「楽少尉、あれ……」
「ああ、哨戒のウィッチですかね？」
以純は小さく笑って流す。
再び、三度、車が揺れてタイヤが回る。

エンジンの唸りが力強く、その黒い角の取れた直線形の車体を前へ前へと進めた。
なんどか街角を曲がると、そこに長大な鉄条網の付けられたフェンスが一直線に伸びていた。
青い旗の掲げられた建物が、次第に右手に見えてくる。よくよく見ると青い地に白い太陽を模式化した旗――青天白日旗と呼ばれる大漢民国の国旗であり、その広大な敷地が国のものだと言うことを示していた。
平屋建ての事務所が次第に大きくなり、その目の前でブレーキをかけられる。
「着きました、ここが白市駅飛行場です」
以純はエンジンを止めてふう、と息をついた。うんと狭い車内で首筋を伸ばした後、隣に置いた扶桑式のヘルメットを手にとる。
――ここで言うしかない。
ごくりと唾を飲み込んだ哲生は、車酔いのおかげか不快感に散漫となる意識に活を入れて大きく息を吸う。
「あ、あの！」
一拍置いて、続ける。
「私、高志航少校とは別人でして……！」
生暖かい空気が車内に流れた気がした。何の音もなく、二人の少女がただ息をする。
以純はふっ、と口角を上げて後部座席の哲生を見た。
「最初から解ってるよ、柳哲生少尉」
「……えっ？」
哲生は豆鉄砲を喰らったハトのような顔を浮かべて以純を見つめた。
ほら。
以純の視線の先で、こんと窓ガラスが叩かれる。
「……えっ？」
そこに居たのは、黒い制帽に黒い軍常服を纏った女性。
少し遊ばせて貰ったんだ。黒髪の女性は、志航はくつくつと笑っ

て、ドアを開けた。
「ようこそ第四大隊へ」

第四話　頭髪上指

「……どういうことですか」

すう、と頭が冴え渡るのがわかった。少女の胸中に渦巻いていた不快感、嫌悪、倦怠、その他様々な悪感情がすっとどこへかに消えていく。そんな感覚。

今までの劇が全て作り話だったと思い知った時のような、不快。

馬鹿にされた。

むかりと眉間に皺が寄る。私を高少校と間違えたのも、全ては余興のようなものだったとでもいうのか。

目の前の女性が何やら気持ちの悪い笑顔で語っている言葉の一文字すらも入っては来ないまま、ぐにゃりと視界が歪む。

――どういうこと。

冴えきった頭の中に、胸に、全身にふつふつと湧き出てくる怒りを押さえ込みながら、少女はすう、と大きく息を吸い込んだ。

「？胡？了！」（どういうことですか）

唐突に大声を上げた哲生に目を丸くする。しかしすぐにもとの平静を取り戻すやいなや、またいつもの調子で口を開いた。

「なんだね？　本日０８０１付けで柳哲生少尉は第四大隊に正式に配属され――――」

「違います！」

「ではなんだと？」

志航はふっと、微笑みを讃えていた口角を戻す。任務に臨むときのような仏頂面で、おもむろに姿勢を崩した。

真面目腐ったそのまなざしに睨みつけられた哲生は言葉を詰まらせたが、ふうとひとつ深呼吸してから口を開く。

「これは……いや、先ほどの芝居は何だったのか！　高志航少校、説明して下さい!!」

哲生は顔を真っ赤に上気させて叫んだ。

目の前には志航。それの隣でおどおどと笑う以純。

平屋建ての事務所の前にそれ以外の人影は見当たらない。

「お、落ち着いて。高少校だって悪気があったわけじゃ……」
ぎろり。力強く、思いを込めて睨みつける。彼女が悪いってわけじゃないのに、なぜだか自然と八つ当たりしたようになったしまう。
「とう、？不起（すみません）……」
びくりと肩を震わせて、ブルーグレーの中山服を纏った少女はすごすごと引き下がった。
ふむ。洒落の通じない娘だったか。志航は小さく、しかし冷静に呟く。
「一から説明すると、だね。……そうだな、どこから説明しようか」
「最初から。私が昆明を出たときから決まっていたとでも」
「差一点儿（おしいね）。正解は一ヶ月前、この準備隊が発足してからだ」
平然と、顔色一つ変えずに返す。
「……どうして、こんな児戯を」
悔しさに肩を震わせ、ぎりりと奥歯をきしませた。
哲生の顔をじとりと眺めながら、志航は告げる。
「どうとでも理由は付けられる。例えば〝私の暇つぶし〟、例えば〝有事における階級誤認への対処〟、例えば〝慣習だから〟、例えば〝気の増強〟例えば〝正一教に伝わる風習〟例えば〝私たちがウィッチだから〟――――さて、お気に召す理由は見つかったかね？」
「直言不？吧（答えて）ぁっ!!」
カッと頭に血が上るのがありありと感じることができた。
馬鹿にされているのがどうしようもないほどに伝わってきて、目頭が嫌に熱い。哲生は水灰色の軍服の下で硬く、無意識に拳を握りこむ。
「……ダメかね」
「ダメに決まってるでしょう！」
一喝。上官に対する態度とは思えないほどの暴言が、頭の中を渦巻いていく。
それを聞いて志航はがっくりと大げさに肩を落とし、ふう、と大きくため息をついた。
仕方ないか。小さくつぶやいて、黒い制帽を正す。

「丁度良い、ウィッチの間で要求を通すときの常套手段を教授してやろう」
さあついて来給え。くるりと踵を返した。
ついでに隣でいつ仲裁に入るべきかと慌てていた以純を呼び止め、命令。
「楽少尉、伝令だ！　第五大隊に今日の哨戒は第四大隊が替わらせて貰う。と伝えておいてくれ給え！」
「――み、明白了（わかりました）！」
扶桑式のヘルメットを被りなおして、敬礼。以純は事務所へ向けて走っていく。
ざり、志航の半長靴が乱暴に、砂を踏みにじる。
「……どこへ行こうっていうんですか」
頬を膨らませ、哲生はその黒い背中に言葉を投げかける。いいようにあしらわれそうになった腹いせに、せめてもの抵抗に。
志航はふと後ろを振り返ると、ぎゅっとこぶしを握ったままの少女を見て、にやりと笑った。
「哨戒飛行だ」

第五話　遠影空尽

「哨戒飛行……って、高少校の機体はどうするんですか！　それに私の機体も！」
「私のものは既にある。柳君のは……」
　そうだな。顎に手をやって少しの間黙考した後、志航はポンと手を打った。
「楽君のものを借りよう。最悪、李君のものを勝手に借りればいいさ」
「問題ないんですか？」
「ないね。壊したら罰走どころじゃすまされないと思うけど」
　軽くいなされながらも、哲生は志航に尋ね続ける。
　歩いていると、未舗装の滑走路の奥に混凝土で形作られた灰色の格納庫が見える。
　案外明るい内部で作業している整備兵たちに軽くあいさつした後、志航は立ち並ぶ白い円柱上の機械の群れの前で立ち止まった。
「上士！　すまないがまた飛行だ。楽少尉のものも修理は終わってるかね？」
　呼び止められた整備兵はカーキ色をした詰襟の軍装を正して志航となにやらこまごまと話す。
　いくらかの質問事項に整備兵は答えていき、それに解を得た志航はよしと頷いて、哲生に来給えと手招きした。
　そこに立ち並んでいたのは、リベリオン製のストライカーユニット。哲生の太ももより一回り大きい丸太のような太さの機体が１０機ほど並んでいる。
　二枚の羽根のような突起を付けた、複葉機。小さな台のような梯子に樽のような円筒状のバックパックが掛かっており、ストライカーユニットと同時に使う物だと一目で解る。
　君はそっちを使いたまえと促されるままに、少女はユニットと何本かのパイプで接続された白色の背嚢を背負った。
「機体点検終了。全て異常なし。電源始動。襟翼全開。魔法混合良し。慣性起動器回せ！」

「知道了(りょうかい)！」
整備兵がエナーシャを回す。小さなハンドルの中に蓄えられたエネルギーが発動機を大きく回す手助けとなる。
ストライカーユニット、大漢では蒼鷹(ツァンイン)と呼ばれる旧式の機体。志航は真っ白に塗られた太いユニットの中に足を通してふむと頷いた。
「――計器確認良し、高銘梅。進発する」
大気中の気がガソリンと混ざり、足元に水色の魔方陣を映し出す。
途端、墨を垂らしたかのように真っ黒い軍常服の下から黒褐色の横縞の入った羽根が生える。使い魔と呼ばれる鬼を使役することで気をより円滑に発揮する術。
続けて可視化された気が魔方陣の上で回り、ストライカーユニットの下部で渦を巻いて安定した。ここまでくれば魔導エンジンと接続できた証拠だ。整備兵はこくりと頷いて後ろに下がる。
ふわり。とユニットが、志航の体が浮かび上がる。オストマルク製の長い軽機関銃をその両腕に保持した彼女は、隣で準備を整えている哲生を見てにやりと笑った。
「それではお先に。上空待機としておくからゆっくり上がってき給えよ」
飄々と言い放って、志航は樽のような大きな背嚢を背負いなおすと前へ。格納庫の出口へ向けて体重をかける。
ゆっくりと、しかし確実に風が強く。強く髪を靡かせる。
そして強く土を蹴るようにして大きく体を前に傾け、志航は空へと飛び出した。
「……電源始動。襟翼全開。魔法混合良し。慣性起動器、回してください」
哲生はむっと唇を尖らせ、呟く。志航の発進準備を整えていた整備兵が少女のそばに走り寄ってきて、ユニットの先端にハンドルを差し込んだ。エナーシャと呼ばれるエンジン始動補助装置に差し込まれたクランクが回り、ガソリンと気の混合を容易にする。
「魔導発動機接続確認。油門開放。空気圧良し。高度計、燃料ともに良し。冷却機稼働、油温正常。解除鎖定」

樽みたいなバックパックを背負い、ユニットへの接続を確認。気の放出ゆえか体の芯から熱さが湧き出てくる。
「柳哲生、いつでもいけます」
「好的（りょうかい）。祝你好運（ご武運を）」
整備兵が後ろに下がったのをちらりと横目で確認して、気を全身へといきわたらせる。
水色の燐光が哲生の体にまとわりつき、臀部に白く丸っこい尻尾を。そして頭頂部に黒い熊のような獣の耳が生えた。
鬼との融和が成ったのを体の熱さから感じ取った後、立てかけてあった銃を手に取る。
オストマルク製の重く、大きな軽機関銃。高少校と同じものなのに、軽々と保持していた彼女からは想像もつかないほど腕への負担がかかる。
ユニットの真下に魔方陣が浮き出たことを視認。気が一気に抜かれていくような錯覚に襲われた後ふわりと体が浮き上がると、復た胸に力を集中させた。
がしゃり。武骨なウッドストックを二の腕に当て、体重を前にかける。目の前の空を目指すように、
倒れんばかりの前傾姿勢で、空気を思い切り蹴りつけた。
その瞬間ぐっと大きく慣性の力が働き、空気の抵抗に体が押されるのが実感できた。
ふわり、と浮遊感。気が薄く体全体にまとわりつき、風を打ち消してくれる。まるでおとぎ話の仙女みたいだな。ふと思い浮かべて、首を振る。
すると飛行場の上をぐるぐると旋回していた志航が飛んできて、やあと気軽に右手を上げる。
「ああ来たか。早かったね」
中央航空学校出のウィッチでも一度は発動機始動に失敗するもんなんだが。くつくつとひとしきり笑うと、上体を上げて姿勢を安定させた。哲生もそれに倣って志航の眼前に立つ。
志航は小さく笑いながら地上を指さした。

「まずあそこに武漢が見えるね」
「……見えませんけど」
おもむろに東を、揚子江が山影に隠れながら地平線まで伸びていく向こう側を指示した志航に、哲生はぽつりと突っ込みを入れる。
おやそうだったか。
「李白を読む者はだれでも心の中に黄鶴楼を持っているものなんだよ」
肩をすくめてとぼけた志航の顔を張り倒したい衝動にかられながら、少女は一つ大きくため息をついて口を開く。
「哨戒飛行のルート指示をお願いします。……どうせ敵怪異の発見並びに撃墜数で賭けようという魂胆なのでしょう」
「就是（ご明察）、じゃあ君の飛行ルートを指定しようか」
志航は東を――市街地のすぐ側にある揚子江の流れる先を指し示す。
「また武漢ですか？」
いや、違う。かぶりを振った後、小さく息を吸い込んだ。
「渝北に航空廠があるだろう？」
「あの光ってる屋根のところですか？」
「☒（ああ）そうだ」
山と山に挟まれるようにして狭く、小さく広がるネコの額ほどの土地に無数の屋根が見える。緑色に塗られた屋根が、ちかちかと太陽の光に煌めく。
「そこを越えて白帝城へ向かい、１時間現地で哨戒活動を行い給え。私は大興城方面へと向かう」
大興城、大漢民国よりも前、土木の変よりも前に繁栄していた大昔の古の都の名前を出した彼女に、まず目を丸くした。
「大興城……って、渝城から６００ｋｍ先ですよ！　そんな、飛行距離ギリギリじゃないですか!!」
「まあ、どう頑張ってもこの蒼鷹では１２００ｋｍほどしか進出できないね」
からからと陽気に笑って、ぽんと哲生の肩に手を置いた。優しく、

ユニットのバランスを崩さないように。
でもそれは君も同じだよ。彼女は嚊嚊と笑って、航空廠へ――ちかちかと光る屋根を目指して前傾。速度を上げて空を行く。
「君の目的地にして大漢民国空軍の前哨基地である白帝城も５００ｋｍ先さ。哨戒飛行を含めればギリギリの範囲だ！」
さあ頑張り給えよ。志航は航空廠の上空までたどり着いた後、大きく手を振った。
北の果てに見える山脈を目指しながら飛んで、次第に小さく黒い点になって消える。
「……真的假的（冗談でしょ）」
哲生はポツリと呟いて、身体の向きを東へ。すこしずつ傾いていく太陽に背を向けるようにして飛ぶ。
茶色に濁った揚子江だけが長く、長く。白帝城までの道筋となって示してくれる。
ただ長江のみが、天の果てまで伸び行くばかり。

第六話　早着詩城

白帝城。古の仁君が没し、その軍師によって防衛されたといういわれのある強靭な城。

三方を川に囲まれた急峻な山の頂点に置かれたその城郭は古来から何人もの君主を守り、その美しい景観は何人もの詩人の歌として大漢全土を渡った。

そんな城に、今では大漢民国による前線基地がこの要衝の地に築かれている……という。

「〝ま、そんな感じだ。何か質問があれば言い給え〟」

脳裏にくつくつと笑う声が響く。大漢民国どころか、どこの国でもこれほど明瞭に、遠くまで聞こえる高性能な無線機が開発されていないというところを再確認すると、何で連絡を取っているのかが一目瞭然だ。

「……分かりましたから、気がもったいないのでもう切ってもらっていいですか」

ぶっきらぼうに返す。

貴重な気をこんななんでもない連絡事に使って微塵も惜しいと思っていなさそうなところに、高少校の優秀さがにじみ出ている、気がする。

はあと一つため息をついたのを聞き咎めたのか、もう少し肩の力を抜き給えと高少校は一しきり笑った。

「〝もうじき南充だ、そっちの方はどんな感じかね〟」

「……河しかないです。本当にこのルートで行って大丈夫なのかってくらいには」

既に渝城を発って一小時間？。いくつもの鎮と城市を越え、ただただ河をなぞってきた。

少しでもガソリンを温存するため高度を下げる。

「〝そのまま揚子江に沿って行けばすぐだから、もう少し頑張り給えよ〟」

再見（それじゃ）。ぶつりと嫌な音を立てて通信は切れた。

「……まったく、高小姐は」
ふんと鼻を鳴らし、若干乱れた魔導発動機の回転数を安定させる。
高度を下げた分、位置エネルギーの関係で若干速度が上がる。その上身体の防護に使う分の気も回せるというのが、仙女（ウィッチ）の利点だ。
茶色く濁った大河に沿って、山と山の間を進む。高度１００ｍ以下という超低空飛行だが、軍艦や家屋にさえ注意すれば十分すぎるほどの高さ。たったそれだけでも空を制することができるというのは大きなアドバンテージとなることを、中央航空学校では〝航空救国〟の四文字で表現している。
「っと」
風がグラリと上体を揺らした。中山服の袖が大きく乱れ、髪の毛が目に掛かりそうになる。
首からかけたスリングに軽機関銃を依託して数秒の間右手を自由に。大漢人をはじめとした東洋人特有の黒い蓬髪を耳にかけると、また銃把に手をかけた。
気を纏わせているおかげか肩と腕への重みが全くないように感じる。玩具の銃や木の棒でも抱えてるような重さだ。
「昆明も山がちだったけど、渝城も随分と……」
山が多い。ごくりと言葉ごと唾を飲み込む。
古来から辺境とされてきた四川、雲南の山岳にも人が集まればそこに住む。ほんの少しの平野と河川を頼りにして細々と食いつないでいく。そしてそれは土木の変以降だって変わらない。
怪異の巣になり果てた荒漠たる大地から逃れた大漢人達がこのほんの少しだけの土地に根付いてから数百年。父もその祖先もずっと四川の広大な盆地の片端に住み着いてきたのだろう。
それを証拠とするように、眼下に流れる揚子江の岸のあちらこちらに土塀とかやぶきの屋根とが混在し、船と船とが行き交う光景が見える。
漁夫は魚を釣って、農夫は作物のために精根を使う。商人は彼らに物を売り、王侯貴族はこれらを正しく統治する――
では、軍人は。

無意識のうちに銃把を握った。スリングの金具ががちゃりと音を立てて鳴る。
「……っと、ここで東か」
これまでは曲がりくねりながらも大きく見て北東に流れていた揚子江が、眼前に見える街の目の前で大きく流れを変えて東を向いた。
楼閣のてっぺんにそびえる金色の飾りを横目に見ながら旋回、漁夫たちが笠に手を当てて飛行を見ているのが小さく視界に映り込んだ。
しかしそれも一瞬のうちに遠くへ流れ、碧空の彼方に消えていく。
道観と廟をところどころの山中に見、ふうと小さくため息をついた。
渝城から離れて行くにつれて、土塀のある屋根が消えていく。茅葺きの屋根に畑だけが広がる村がネコの額ほどの土地に点在している。
大昔の蒸気船、更に昔から変わらない木の船に筏が浮かんで、空をただ一直線に飛び続けるウィッチへと手を振っていた。
「〝やあ柳君、もうじきついたんじゃないかな〟」
突然、ざりっと耳に砂が入ったときのようなノイズが脳裏に走る。
「……高少校、気の残量は」
「〝余裕だよ。……まあ、多少は疲れたがね〟」
そんな覇気のない声でいわれても。
すぐにまたぶつりと嫌な音を残して切れたあと、はあ、と大きく嘆息して前を見た。
目の前で、揚子江が二つに分かれる場所がある。まるで半島か岬のように突き出た土地によって、川が二股に分かれる。
その先端に緑で生い茂った城が、城郭が立ち並んでいた。
上体を起こしてバランスをとり、銃床を二の腕にあてがって息を整えながら、小さく呟く。
「ここが……」
白帝城。死んだ龍の端にこびりついた、人類の最前線。
常緑の城が、紅砂に？まれた大地に立ち向かうように聳えていた。

第七話　巫山猿声

「ここから一時間の哨戒飛行か……」

うんと疲れ切った肩を伸ばすようにして空を見上げる。真南で煌々と輝いていた太陽も若干西へと傾き、少しずつ陰りを見せ始めた。

およそ一時間後には紅の空になっているだろう。緑の城と紅砂の大地が黄昏色に染まる光景を夢想し、ふぅと一息ついて銃を擬す。

外部から背負う形になっている樽のような大きさの背嚢を背負いなおすと、肩に食い込んでいた革紐が緩んで鈍い痛みが広がった。

「痛っ……ぅ」

せき止められていた血が流れ出すような感覚。健全で健康的だが、その不快感を止めようはない。

グルグルと一通り肩を回し、首を回し。白帝城の上空に漂ったまま一旦の休息をとる。

衛気と営気を保ったままに空中でバランスをとるのは根気のいることだが、まあ慣れれば出来なくはない……といったところ。ほんの少しでも集中を乱せば発動機の調子が悪くなり、仕舞いには墜落してしまうところを加味すると、休息中でも完璧な安心は出来ない。

「気もガソリンも消耗品だから……そろそろ行かないと」

ぺちりと両手で頬を叩いた直後、突然ザリザリと嫌な音が耳の奥で響いた。

「うわっ！　が、高少校!?」

びくと肩が跳ね上がる。魔導無線――気を用いた指向性ネットワークの接続時に、無理やり砂を耳の穴の中に押し込まれるような気持ち悪いノイズが走るのは、本当に直した方がいい。それか大漢民国空軍でも携帯無線機を装備するか。

恨み言と一緒になって、がくり、と発動機の回転数が落ちた。

「未確認機につぐ。所属と官姓名を名乗られよ」

「それどころじゃないんですが！」

崩れるバランス、近づく水面に軽くパニックを起こしかける。

ざりざりと喧しいノイズに構わず、右脚の飛行脚へ気を集中させて体勢を立て直す。
「……未確認機、所属と官姓名を名乗れ」
再度入電。
今度は脳裏に入り込んできた気の流れに集中して、確認
。冷静に、氷のような女性の声が、少し訛りのある大漢語を扱ったのが解った。
「こちら大漢民国空軍の柳哲生、階級は少尉です。所属は……」
そういえば、高少校の部隊は何という名前だったか。うんとうなり、思い当たった名前を口にする。
「所属は第四大隊準備隊……高志航少校の部隊です」
「明白了(りょうかいしました)柳少尉。こちらは奉節防空監視哨。呼号(コールサイン)は〝石兵八陣(shibingba chin)〟、一時間の哨戒飛行を許可します」
「了解。これより前線哨戒を行います」
訛りの入った声が、淡々と事務的な事項を告げて無線を終了させた。
よしと頷いて、銃把を握る拳に力を込める。これまで温存していた気を上昇へと回し、風を切って揚子江の上空高くへと舞った。
揚子江に沿った山々を、穴が空くようにねめつけながら飛び続ける。何か異常らしきモノが見つかれば銃を構えてその山に急行する。基本的にはその繰り返しだ。
四川盆地の外縁を成す山岳が高く、高く積み重なり、それ自体を堅牢な要塞と仕立て上げる。大漢の諸王朝が土木の変以降に生き残った理由の一つとしてこの急峻な山脈があげられる。
巫山神女と呼ばれたように、神代の時代から仙女(ウィッチ)の祖先がこの山々に隠れ住んでいたことも一因するのだろうが、大巴山山脈をはじめとした自然の要害という物も果てしなく大きい。
「……ん？」
ちかりと、山の端が光った。
渝北で見た航空廠の屋根みたいに銀色の、ほのかに赤みを帯び始めた太陽の光に当たってちかりと煌めく、金属質な輝き。

あんなところに鎮や道観なんてあったかな。
ふと首を捻ると、銃把を軽く握り直して山の中腹へ。緑で生い茂った山へと飛んでいく。
キラリとした光は近付くにつれて形をあらわにし、銀色の巨体が目に入る。
薄汚れた灰色の蜘蛛のような体から、一本。甲虫の角のように生えたそれは、砲。
えっ
一瞬、反応が遅れた。
刹那、轟音
「――――っ!!」
パッと視界に火花が散った。

第八話　巫山弾雨

その瞬間、長大な砲が火を噴いた。
マズルブレーキも何もない無骨な砲、正確には〝それを模した器官〟を備えたその生物は、爆炎の向こう側に墜ちたモノをぼんやりと見据える。複眼を以て、ぼんやり、と。
水銀が凝り固まったかのような巨体に、てらてらと光輝く重砲。サソリのように丸まった砲塔の下から、のっぺりと平べったい六角柱の体が這い出している。
四本の足で長く伸びた草を地面に押し付け、土とともにざりと踏みにじった。
彼らを怪異、と人は呼ぶ。
その体は生物というよりはむしろ、機械。サソリのはさみのような金属光沢をもつ巨大な鋏がガチ、ガチと軋みを上げて打ち鳴らされる。
バキバキと幾本もの小枝をへし折り、大木を根本付近から押し倒しながら重苦しく動きだす。
銀色の怪異はその金属質な体をのそりと揺らして、また草むらの中に消えていった。
西へ、西へ。瞿塘を越えて白帝城を目指し、のそり。のそりと。

「……っぅ」
少女はぼうぼうに生えた草むらの中で目を覚ました。カアカアとなく鴉のもの悲しげな鳴き声が耳に入って、意識が鮮明に覚醒する。
時間の感覚がない。一瞬の立ち眩みなような気も、一日中寝ていたような気もする。
思い出されるのは銀色。そして砲撃。
蜘蛛のような、サソリのような銀色の生物の攻撃で、撃墜された。
それだけは確証できたのに。
「……生き、てる」
哲生は、呆然と呟く。

「……撃墜された、はずなのに」
何で。敵のアンブッシュに完全に嵌ったはず。
混乱する頭を押さえ込んで、衣類の乱れ、ストライカーユニットの破損確認などを行った。
手をやった臀部からは獣の尻尾が消え去っており、ぽかぽかと温かかった気も大半が喪失している。
とはいえユニット自体の破損はほとんどなく、魔導発動機を内包した背嚢も無事。オストマルク製の巨大な軽機関銃も無事を確認できた。
「そうだ。奉節防空監視哨に連絡……」
気を使うにあたってユニットを装着する必要は無いが、装着していた方が気を練り込みやすい。ごてごてした太い機械の塊に足を通しなおすと、航空学校で習ったとおりに下腹部、丹田へ力を込めた。
胸の奥がじんわりと熱くなってきて、お腹に温かい気を溜め込みながら手足へと広がっていく。
そばに転がっていた背嚢を背負い込む。その瞬間ずしりと、少女の肉体には重すぎるほどの重量が肩にのしかかった。
ぐらり。足が震え、腰が笑い、草むらの上に尻もちをつく。気の巡りが良くなかったのか、力が入らない。
「っ、？死吧（ちくしょう）……！」
カッと沸騰した頭のまま、丹田に力を込めた。
赤熱した感情を無理やり下腹部に押し込んで、そのままふいごで火に空気を送り込むように気（魔法力）を扱う。
お願い。
哲生は神仙への祈りと気の放出によって上昇する体温の中、鬼へただひたすらに祈った。ぴょこんと白い熊のような尻尾に、黒い同じく熊のような丸っこい獣耳が生える。
鬼との融合が終わると、より円滑に宗気を丹田から練り込んだ。
宇宙を包んで大気中に漂う気の動きに意識を集中させ、ただひたすらに。
「〝石兵八陣〟、〝石兵八陣〟、応答せよ!!　こちら第四大隊準備隊柳

哲生！」
　ざり。指向性の魔導ネットワークに接続されたとき特有の耳障りなノイズが、哲生の耳孔に薄く広がった。思わず耳をふさごうと体が動くが、それを意志で無理やり押さえつけてさらに強く、気を強く保つ。
「……こちら石兵八陣、柳少尉どうぞ」
「繋がった！」
　やったと叫んで柏手を打った。定型文の無線応答を終えた後、哲生は大きく息を吸い込む。
「怪異発見!!　応援を要請します！」
「……怪異発見了解。柳少尉の現在地を申告されたし」
　現在地。とりあえずここは草むらということしかわからないが、飛行ルートと時間から大まかにではあるが推測ができる。
「恐らく巫峡です。巫山県巫峡鎮周辺」
「巫峡鎮了解。発見時刻は現在の１６００時ですか？」
「いえ、……恐らく、空模様から1時間ほど前かと」
　1時間。オペレーターはポツリとつぶやいて、何やらうなった。
「わかりました。直ぐに渝城へ情報を送信します」
　柳少尉も即時帰還するように。
　オペレーターの静かな声色とともに通信が切られ、同時にざりざりとしたノイズが消えていく。
　昂っていた気がだんだんと落ち着きを取り戻し、状況を確認する余裕もできてきた。草むらから身を起こして宙へ浮かぶ。
　寂びれた土塀の家屋と茅葺の家々。荒れ果てた野原や真下に見える大河から、かつて放棄された村の遺構に墜落したのだとわかった。
　沈み始めた西日が綺麗に茶色く濁り切った揚子江を。そしてその向こう流れる先にちらりと見える紅砂にまみれた荒れ地を照らす。
「……もう、帰ろうか」
　中央航空学校でも夜間飛行の訓練は受けていない。少女はうんと肩を伸ばすと、スリングを肩にかけて銃を保持した。
　水色の魔方陣が草むらに覆いかぶさるように描き出され、仙女の権

能、そのすべてが哲生の体に宿る。
あれ。
寂びれた集落の廃墟の奥、川に面した山の裾野にちかりと光った銀色に見覚えを感じて、彼女はぽつりと呟いた。
「あれ……さっきの怪異、だよね」
視線の先、常緑の広葉樹に体の大半を埋め、草影に銀色の砲を隠した怪異が、そこに横たわっていた。
蜘蛛とサソリを足して機械的にしたような外観。小さな家一軒丸ごとが横たわっているかのように巨大なのっぺりとした体に銀色に薄汚れた巨大な砲塔がのっかったサソリ――人類の機械技術で作ることができれば『多脚戦車』とでもいえそうなその怪異は、のそりと起き上がると草木に身を隠しながら山の奥へと進んでいく。
「……倒せる、かな」
アンブッシュにさえ気を付ければもう大丈夫。
欲が出る。ごくりと唾を飲み込み、銃把を強く握りしめる。
怪異の弱点は判らないが、脅威はあの尻尾に取り付けられた長大な砲だ。
のそり。銀色の脚が何本もの若木の枝を折り、体の揺さぶりに薄銀色の砲が振り回されては老木に突っかかり、たやすく破砕して動いていく。
哲生は銃を胸に保持すると、荒れた畑の成れの果てとおぼしき荒野を飛んで集落を、その先の名峰巫山を目指した。
流れる風に、銀色の装甲が輝く。
こういう怪異の対処はシンプルに破壊、ないし無力化に限定される。
そのために真後ろから――サソリという生物の構造上の欠点である大きすぎる尾を狙って、照準を合わせた。
「とった！」
押し殺された小さな叫びとともに、引き金が限界まで引かれる。
解放された火薬が膨張し、鉛の弾丸を一直線に吐き出す。相対距離1mを切ってもその弾丸は尽きることなく、巨大な砲塔にぶつかるや

いなやのすんでのところで首を上げ、丁度怪異の真上を通り過ぎた。
そこで体勢を立て直し、怪異に対して正面から相対。
「……うそでしょ」
何の傷もついていないように見える尻尾を恨みがましくねめつけて、怪異の胸殻の上部に空いた黒い眼窩のような穴を見通した。
哲西はすぐさま数発残っていた弾丸をサソリのはさみに当たる箇所へ向かって打ち出す。
銀色の無機質な体表に鮮やかな火花が飛び散り、無残にひしゃげて弾き返されていく。
弾倉を交換。３０発分の箱型弾倉をズボンのベルトに着けた弾倉嚢から取り出し、空になった弾倉を地面に向かって無造作に投げ出した。
「怪異って、こんなに」
堅い。まるで山に向かって礫を投げ付けているような。
銃把を握る手に汗が浮き出る。この戦闘活動で気とガソリンと貴重な時間を無駄にしている分、長期戦は望めない。心に刻んで、からからに乾いたのどを唾で潤す。
のそりと重苦しく動いた怪異はその尾から生えた長砲身の砲を宙に浮く哲生へ向けて擬した。
「っ……！」
直後、轟音。
砲口からにじみ出た閃光が森の中に煌めく。戦場(重)の女神(砲)を思わせんばかりの砲弾は一発、巫山の茜色に染まった空へ向けて飛び上がった。
数秒ののち、遠い山の向こうで遠雷のような爆音がとどろく。
「危なかった……！」
でも、当たらなければいい。
発砲した際の衝撃波を水色の防護陣(シールド)で防ぎ切った哲生はにまりと薄く笑って照準を合わせた。
すぐさま怪異の右側に銃撃が浴びせかけられる。局所的に火花が散り、金属質の物質が連続して擦れあうような音が、機関銃の発砲炎

とともに森の中へと響き渡る。
弾倉が投げすてられる。機を熟したようにと、砲が動く。
それを見て、砲口から逃げるように空を舞う。
発砲、爆轟。すでにそこに少女はなく、ただ虚空へ向けて砲弾は飛翔した。
最後の弾倉がベルトから取り外され、装填。水灰色の軍服をたなびかせ、少女は槓桿を一度引いて構えた。
「……貫徹は無理、なら……っ」
哲生は全身に気を張り巡らせて怪異へと一直線に翔ける。
頭胸部にあたる箇所、普通のサソリなら単眼があると思われる穴を見据えて、銃を突きつけた。
銃口を、ぐにょりと柔らかい感触が返す。液体金属で湯圓(だんご)をつくったらこんな感じなんだろうか。ふと、脳裏をよぎった。
鉛玉が一気呵成に飛び出し、怪異の金属質な眼球を押しつぶしながら胸殻を突き破る。
その瞬間銃を掌から離し、眼窩に突き刺したまま捨て置いた。
白色のストライカーは長く伸びた銀色の重砲の横すれすれを飛び去って旋回。怪異の後方上空からこれに臨む。
眼球を潰され、体内で鉛弾を暴れ回らせた怪異はその巨大な砲を大きく空へ向けて仰ぎ、断末魔の叫びとばかりに一発、天に向かって弾を吐きかけた。
銀色の砲弾は空高くへ飛び出すと、それきり戻ってくることなく。
「……やった！」
銀色に耀いていた怪異は四肢から力を抜くと、だらりと尾部の重砲を木々の破片へと横たえて崩れ落ち――――そのまま、巫山に降りそそぐ雪のように白く爆ぜて。消えた。

第九話　誰何一叫

怪異の死は、人間やその他の有機物・無機物問わず殆どの物質と異なり〝消滅〟という形で発生する。死亡――怪異自体の機能が停止したとき、その全身が白い剥片となって爆ぜ散り、跡形もなく風に飛ばされてしまうのがそれだ。

大漢民族の主流教派である道教的思想においては、その体を構成する気が霧散し道へと転じるため――と解釈される。

ただし炭が灰になるのに時間がかかるように、気が霧散していくにも時間がかかる。

〝万が一あるかもしれない〟とされた怪異との戦闘では、敵の攻撃のほかに破片の飛散に注意して即座に退避せねばならない。丁度三か月前に卒業した中央航空学校ではそう言明された。

「覚えてた、はずなのにな……」

哲生はぱちぱちと軽い音を立てて火の粉を上げる焚火を恨みがましく眺めた。

夜のとばりは既におり、明かりがあっても目の前２ｍ先すら見えやしない。

はぁ。小さく吐いた息が、真っ白く靄のように漂っては消える。ぶるりと身震いして焚火の前に丹田に

夜間飛行ができない大多数の仙女にとって、目の前にある大木にも気づけないというのは大きな障害だ。見えた瞬間ぶつかっているようなもので、極力飛ぶべきではないと厳命される。

少女はふと思い返しながら、古びた家屋の土間に蹲っていた。

家屋の廃材からはぎ取った木材がぱちりと火の粉を散らし、それきり土間に静寂が訪れる。

「っ、……寒い」

ぶるりと身震い。

丹田に力を籠める。少しでも体温を保持したいなら、魔法力――気を発して微弱なりとも発熱、保温を行う。それが山中での遭難時の常道だ。

練った気を薄く体内に張り巡らせる。胸だけに蟠っていた熱がじんわりと血管を通じて全身に行き渡り、指の先までほんのりと体温が感じられるようになる。
ほう。と思わず嘆息した。
「これでユニットが無事なら良かったのに」
ちらり、土間の片端の壁に立てかけられた一足の白い円錐――ストライカーユニットと同じく白い樽を眺める。
背負い紐のついた樽、魔導発動機のユニットから伸びた何本もの管は無残にも途中から斬られており、その鋭利な断面から電線のような赤銅色のコードがみえた。
「……はぁ」
大きく火の粉を散らして、炎は揺れる。
「結局、撃破報告も遭難報告も出来なかったし……監視哨の人も高少校も、探してるかも」
はあ。一つ嘆息した。
怪異の撃破からかれこれ数時間と言ったところだろうか。時計がなく日も見えない現状では、時間の感覚も薄くなる。
だがそれほど長い時間何の連絡もなければ、何らかのアクションを取るだろう。何せ宗教的にも軍事的にも貴重な仙女だ。悪くてそのまま未帰還（MIA）、良くて回収班が組織される……といったところか。
ぽつりと小さく呟く。
「明日明るくなったら、歩いて帰ろう」
でも、そこまで上手くいくだろうか。
ため息をついて、ぎゅっと銃を抱き寄せた。
白帝城までおよそ７０ｋｍほど。飛べば２０分でつくものを、歩けばどれだけ掛かるか分からない。
しかも、ストライカーユニットによって気を増幅させることが出来なくなれば、後に残るのはただの少女だ。
大きな魔導発動機も、歩くことを考えていないユニットも、１０ｋｇ近い重さを誇るオストマルク製の軽機関銃すらもデッドウェイトに他ならない。

焚き火がぱちと、小さく火の粉を飛ばす。
細かく崩れた炭の上に乗せるように、細く切られた板を置いた。
隙間風が炎を揺らす。
農家の家、と言ったところだろうか。留め具がガタガタに緩んでつかいものにならなくなった鍬が壁に立てかかっていた。
「……寝ようか」
哲生は燃えさしを焚火から外す。火が燃え移ったばかりだった廃材は土間に広がる土に思い切り叩きつけられると、炭化した先端をまき散らしてその炎を消した。
続いて銃を置いて立ち上がると、鍬から鉄製の刃を取り外すために戸口へと歩み寄る。
瞬間、外でざりっと砂が鳴いた。
「っ!!」
弾丸の入っていない銃を思い切り拾い上げると、両腕で無理矢理正眼に構える。
銃身を強く握り、木製の銃床が先端に来るように。
巫山の向こう側、宜昌の地からは人の住むところではなくなっている。そこに跋扈するのはただ、銀色の無機質な肉体を誇る怪異の群れだけだ。
だからと言って怪異がいないわけではない――ついさきほど撃破した怪異のように。
「……誰っ」
答えはない。板が小さく爆ぜ、ごくりと唾を飲む音だけが広がるのみ。
震える唇をぎゅっと強く結ぶと、気をより強く練る。ほのかな温かさが全身に広がり、両腕へと収縮される。銃を持つ腕の震えがなくなって、まるで木の棒でも握っているかのようだ。
気による筋力の強化が確認された後、すぅ。と呼吸を整えて戸口へと歩く。
ざり。なった砂の音は哲生のものか外からか。
返すようにもう一つ、ざりと。

唾をのむ。乾いたのどを唾液が通り過ぎていく。
ざり。戸口の向こう側で立ち止まった足音に、銃を握る手に汗がにじむ。
がたん、大きく音を立てて揺れた木製の戸口へ向かって、軽機関銃を思い切り振り上げた。
「やぁぁっ!!」
気を通したウィッチの筋力で振り下ろされた１０kgの鉄の塊は、そのままの勢いをつけて振り下ろされ――水色の燐光に阻まれる。
ガツンと重量感のある衝撃が発生し、銃が哲生の腕から離れた。
えっ？
鳩が豆鉄砲を食ったような顔で水色の燐光を見つめた哲生に、戸の向こう側から声がかけられる。
「まったく。信じて送り出した子がこんな遅くまで帰ってこないとは驚きだよ、いったいどこの娘娘と遊んでたのかね？」
現れた水色の魔方陣――シールドが消え去ったあと、黒髪の女性が漆黒の闇から浮かび上がるように戸を開ける。
「がお、しゃおじえ……？」
小姐（シャオジエ）じゃない。少校（シャオシアオ）だ。
黒髪の女性は――高少校は、くつくつと静かに笑った。

第十話　上渝水城

空にあこがれていた時が、昔はあった。
黒くて深くて、遠くの大空へと落ちてきそうな常闇も。眩しさに目をくらませてしまう暁天も。
広くて大くて、遠く太歳の星を望まんばかりの星空も。寂しさに目をうるませてしまう黄昏も。
星々で天命を伝え、だけども黒く分厚い雲で星宿を隠したり。
かと思えば朧雲の向こうに満月を浮かべたり、遠く西方の神を使わして月を赤く焼いて食べてしまったり。
そんなくるくると移り変わる空模様が、それも含めた天空が大好きだった。

そんな大空を、彼女は危なげなく舞う。
複葉の真っ白いストライカーユニットに太い樽のような発動機を背負い、黒い墨色の軍常服が夜風に揺れる。
月の明かりに純白のユニットが煌めいて、地上からなら流星のように見えることだろう。
「高小……少校」
ぽつ。と、風に流されるくらいか細い声で呼んだ。
「なんだね柳君」
君から話しかけてくれるとは、嬉しいことだ。
志航はくつくつと笑って、腹に抱きかかえられた少女を。哲生を見た。
対不起（ごめんなさい）。呟かれた黒い獣耳が濡羽色の髪に交じって申し訳なさげに震える。
「今日は、すみません。昼の上官反抗といい……回収といい、迷惑かけてばかりで」
「結構結構。むしろそれくらいあってしかるべきだ」
志航は、小さく笑った。
「西伐前だって今だって、上官反抗なんかに営倉を割いてたら半日で

満腹だ。回収だって、白帝城で一夜を過ごさせてもらうからその苦労も無いような物さ」
それに。一拍おいて、続ける。
「良い経験になっただろう？」
「……はい」
肯いた哲生を後ろから抱きしめながら、志航は笑う。
銃も地図もない軽装備で夜の空を飛びながら、それは良かったと小さく溢した。
「代わりにユニットを一つ壊してしまいましたけど……」
哲生は巫山の廃屋に放置してきた借り物のユニット一式を思い出して、呟く。
「帰ったら李君に謝っておき給えよ」
罰走どころでは済まないと思うがね。
志航は小さく微笑んで、ふと空を見上げた。
厚い雲の下から逃れた月が真南の最も高い天に上り、煌々と輝く。
「そういえば高少校、夜間飛行できたんですね」
「大漠の空も長いからね。西蔵の荒野や大興城の紅砂にまみれた砂漠に比べれば、これくらい些細なことさ」
「そう、なんですか」
哲生の頭から生えた丸っこい熊のような獣耳が小さく震えた。
「そうだとも。今日も秦嶺を越えて南鄭まで行ってきたところだ」
「高少校も哨戒に……？」
「ああそうだ。忘れたのかね？」
昼に出たばっかりじゃないか。小さく苦笑しながら志航は答える。
丁度つまらない意地の張り合いになって頭に血が上ってしまった時のことだ。哲生の頬に朱がさし、恥ずかしさにつられるようにして獣耳がしなりと若干力なさげに折れた。
「そ、その節は本当に」
「你不必道歉？。（やーめーたーまーえ）気にする必要はないんだ」
くつくつと愉快げに一嚔すると、何かを思い出したかのようにはっと顔を上げて呟く。

「そうだ。少し昔話をさせてくれ給え」
いいかね？　志航はおもむろに口を開いた。
「私は昔、四川軍――張学良の軍に所属していてね……今でいう八路軍さ」
柳君は四川の生まれだったよな。志航の問いに、少女は肩から回された細い腕を強く握って返す。
「まあ、その関係で第二次西川戦争の直後にガリアへ航空ウィッチになるため留学をしてきたんだ」
「西川戦争……お父さんが従軍してたって聞きました」
四川盆地で発生した、二つの大きな軍閥同士の戦争。西伐前の、国母がまだ生きていた時代の出来事。
確か２４年だから、１３年も前か。ぽつりと志航は呟き、続けた。
「ガリア式の訓練は難儀で難儀で。なんど脱柵しようとしたかわからない……なかでも訓練飛行が大の苦手でね」
丁度こんな風に。
肩から回されている志航の腕を、少女はぎゅっと握った。
新人の航空ウィッチに訓練させるための共同飛行の時のようで、懐かしさとともに気恥ずかしさも感じる。
そんなウィッチならだれでも通る道である訓練飛行が苦手だったと聞き、哲生は思わずくすりと笑った。
「笑わないでくれ給えよ、これでも本当だったんだ」
拗ねたように唇をとがらせる。
「それで結局、向こうの教官にごねて肄業にしてもらったんだ」
「肄業？　仮卒業って……ことですか」
聞き覚えのない単語に、哲生は瞼を閉じてむむと唸った。気を発する丹田が、志航と密着している背中がほのかに温い。肄業（いーいぇー）、？業、医業、☒業、易業。同じ音の文字がゆったりと踊り、ぼやけて消える。
志航はふっと口角を上げた。
「まあそんな感じだね。昆明でいうと〝単位が足りないのに卒業できた〟……ってことかな」
「それは、すごい……」

「まあね。教官へごねすぎたきらいはあるけど、結局ガリア政府と四川閥の間で何らかの政治的取引があったんじゃないのかとも疑ったくらいだ」
そうして、くつくつと笑う。昔を懐かしむように、かつての失敗を面白おかしく回想するように。
だから、だ。彼女は幼い子に諭すかのように、口元に笑みを浮かべながら語る。
「……昼のあれくらいが反抗に当たるなら、私なんて抗命罪だ。上官にごねて肄業扱いにさせてもらうなんて、軍法会議ものだぞ？だから――」
別に、気張らなくてもいいんだ。
ふぅ。すべての文句を言い終わると、大きく息を吐いて、数秒瞼を閉じた。
昔話というほどでもないが、気休めにはなってくれるだろう。
そう結論付けると、志航はむと小さく零して少女を見やる。
「……柳君？」
返事はない。腹から下腹部にかけて、丹田とは別に熱を持った体温がぴったりと張り付いている。
「寝たかね」
居眠り飛行は危ないぞ。志航は静かに、優しく抱きかかえた身体をゆらす。だらりと脱力した素足が蒼鷹の下でゆさりと揺れ、青灰色の中山服が風に衣擦れる。
哲生の黒い獣耳と白い尻尾が水色の燐光になって、黒いズボンから夜空に向かって溶けるように消え去った。
「爸爸……」
小さく夢心地に呻いた少女に目をやる。
お父さん、か。クスリと微笑んで、気を更に強く練るとユニットの回転を早めた。
「期待に応えてくれ給えよ。柳哲生少尉」
そうしてくつくつと志航は笑った。発動機は再び大きく嘶き、まだ旅の途中だと伝えてくる。

波は大風に逆らってわき起こり、尾を引いて雲が月明りに照らされる。

瞿唐へ。渝城へ。立ちふさがる⊠?堆を越えて、晴れ渡った夜空を飛んでいく。

第一一話　省非礼負荊

「……ん」

哲生は小さく呻いた。

うすらとぼやける視界の中に、丸い窓枠へとぴったり収まった金網が見える。錆びた索条に水滴が浮いては赤銅色のしずくになって、そのまま結節の方へと伝っていた。

「……暑い」

顔をしかめて呟く。からだの節々が重く、痛い。

体温が毛布一枚の下に隠って、じっとしていても汗が吹き出してくるようだ。長袖の中山服がうっとうしくて適わない。

ぼんやりとした視界にうつるのは木製の牀(寝台)に、布切れのように薄い被子(掛け布団)。小さな黒い木のブロック――枕(枕)?が後頭部に堅い感触を押し返している。

いやな湿り方をした首筋に、肌に貼り付いた中山服がべとりと気持ちの悪い冷たさを突きつけた。

「ここは……?」

身を起こし、瞼を擦る。上半身が毛布から取り払われ、朝の冷たさを含んだ大気へと触れた。

牀に差し込む朝日がうすらとぼやけて、光が滲む。長い雨の後のようなほんのりと重くしめった匂いをかぎ取って、ああ霧か。と結論づけた。

ズボンの上に掛かっている毛布を剥ぎ取り、牀からすぐ下の床へと飛び降りる。

板間に素足がぺたりと音を立てて貼り付く。やけに重い身体の節々に首をかしげながら、哲生はゆっくりと木製のドアノブを押し下げた。

「おっと」

ふと。押し込んだ廊下の側から声がする。危なげなく、飄々とした低めの声色で扉を受け止めた。

声の主はコツリと踵をならして板の廊下を一歩移動すると、戸先の

散りに手をかける。
将校用の白い手袋に、炭のように黒い軍常服の袖。細い首にあてがわれた詰襟に、金糸の2本入った一つ星。
少女は、ふっとドアノブを握る手から力を抜いて破顔した。
「おはようございます、高志航少校」
「おはよう、柳君」
志航は、扉の前に立つ哲生に小さく微笑んだ。
失礼。おもむろに隙間から軍靴のつま先が差し出される。少女はこくりと頷いて外開きのドアを押す。短い髪が舞い、小さな房子の中で踵を返す。
こつりと軽い音が、その瞬間に外界から閉ざされた部屋に響いた。
「昨夜はよく眠れたかな」
「……え?」
ぽつりと問われた言葉に、思わず返す。
昨夜はよく眠れたかなと言っているんだ。
志航は続けた。
「……もし枕子が合わなかったりとか、羽虫が夜うるさく飛んでいたとか、蒸し暑くて眠れないとかあれば出来る限り言ってくれ給え」
「い、いえ。それは大丈夫なんですが……」
簡易的な牀に腰かけて、俯く。
水灰色の中山服とズボンが牀と粗末な毛布を背景にして視界に映る。哲生の隣に腰かけた志航の長い黒髪が視界の端に映るたび、少し気恥ずかしさと緊張感が増したような気がする。いてもたってもいられず、脱力させていた両腕を膝の上にのせてその指を絡ませた。
「なんだね、言いにくいことか?」
不安げに顔を覗き込もうとする。ちらりと目をやって、哲生は皺を寄せた眉毛を元に戻した。
「……ここはどこでしょうか」
ぽかんとした志航の顔が目に浮かぶ。今尋ねるべきではなかったか。若干の後悔を胸中に漂わせながら哲生は俯く。

志航はふむと一つ鼻を鳴らして、牀から腰を上げた。
ふとつられてその顔を見上げた哲生に笑いかけると、白い将校用の手袋に包まれた人差し指をまるで西洋??(オーケストラ)の指揮棒のように目の高さまで持ってきて、にこやかに口を開いた。
「ここは大漢民国空軍航空委員会第三処第八科所轄の奉節防空監視哨隊舎だ。場所はわかるかね？」
長ったらしい正式名称を、陀羅尼か六甲の秘祝(呪文)のように羅列する。
奉節防空監視哨――どこだったかと思考が揺れる。最近どこかで聞いたような、でも思い出せないような。微妙なもどかしさ。ぐるぐると目を回す哲生に目を向けて、くつくつと彼女は笑った。
「ええと……奉節県には甘皇后廟と永安宮と⊠?(くとう)堆くらいしかなかったような……」
「悪い悪い。ええと、どう説明すればいいかな。ここは奉節防空監視哨と呼ばれる大漢民国の基地だ。昭烈帝の没した……白帝城を改修して簡易的な前哨基地にしている」
ただ名前があまりに長すぎるおかげで、大漢民国の誰もが大昔通りの白帝城と呼び続けているんだ。
明白了(わかったかね)？？　ちらりと覗かれた視線に、哲生はこくりと頷くことで返した。
「でも、なんで白帝……あ」
哲生はふと頭を巡らせ、つい昨日のことを思い出す。上官反抗と、単独哨戒。怪異に撃ち落とされ、そうしてその結末のことも。
思い出したかね。志航は静かに口角を上げ、反対に哲生は顔を下に俯いた。
「……あ、あの節は本当に」
「你不必道歉(やーめーたーまーえ)？。昨日も言ったが、気にする必要はないんだ」
対不起(ごめんなさい)。その言葉を塗りつぶすように、彼女は笑った。
「覚えちゃいないかもしれないが、それは私もよく通った道だ。気にしてはいないさ」
志航はくつくつと楽しげに笑み、ちらりと哲生に目をやる。
ごくり、唾を飲む。絡まった指が自然とほどけて握り拳にかわり、

伏せたままの顔をゆっくりとあげた。
「……諒をして非礼を働いたこと、吾身に省みます」
「うん。むしろ謝ってもらうより先を見据えて精進を積んでもらえるならば、第四大隊隊長としても大変喜ばしいことだ」
「我才(なるほど)？了、それはそれは誠に喜ばしいことですね」
低い、低い声が響く。少女が無理矢理声を低めたような、声。
志航の頬が固まる。ぽとりと、金網を伝って水滴が落ちた音がする。
痛いくらいの静寂の中、第三者は木製の戸を思い切り引き閉めてから切り出した。
「ところで私のストライカーの所在を知りませんか。昨日の昼からなぜか見当たらないのですけれど」
被子についた腕に力が籠もったのか、簡易な牀がぎしりと鳴いた。
哲生は腰掛けていた牀の端から立ち上がると、ごくりと唾を飲み込んで〝第三者(ディーサンジャ)〟へと視線をやる。
それはカーキ色の詰め襟の少女。昨日出会った楽少尉……以純と同じくらいの年に見える背丈。その体躯に纏った軍服は中山服とは少し違う装いで、鉢巻が無くシンプルな――悪く言えば堅苦しい制帽と相まって冷徹な印象を漂わせる。
そう、どちらかと言えば大漢民国と言うよりは海の向こう――扶桑皇国の軍装に近い。
「私の蒼鷹(ツァンイン)を知らないか。と聞いているんです。心当たりがあるなら早急に吐いたほうがよろしいのでは？」
こつりと軍靴が音を立てて一歩近づく。早口で捲したてるその顔は、その声は、大漢のものだ。
少女は焦りを顔に浮かべている志航をちらりと一瞥した後、哲生の目の前に立つ。
話は全て聞かせて貰いました。
そう少女は前置いて、鋭く尖った視線を目の前の哲生に向けた。
「……あの、蒼鷹は」
小さく息を吸い込んで居直った哲生の言葉を遮るように、少女は強

く睨みつけてその水灰色の中山服の胸ぐらを掴み上げる。
ぐいと、哲生の顔が少女に近づけられる。敵意を剥き出しにしたその眦に息を呑み、哲生は一歩、下がろうとした。逃すまいと力強く衣を巻き込んだ拳が胸にめり込み、哲生はけほりと咳き込む。
「やめろ李君！　柳君は……」
「高少校は黙っていて下さい！」
これは仙女（ウィッチ）と仙女（ウィッチ）の話です。立ち上がって二人の間に入り制止しようとした志航を少女は睨みつけると、すごすごと引き下がった彼女に目をやってから哲生を向き直る。その細い腕に強く強く力を込めながら。
「説明義務があります。官姓名の後にこの事態発生までの経緯と発生後の顛末等を詳細に答えて下さい」
ほら、早く。
その少女は貼り付けたように口元をゆがませる。左頬だけを大きく上げ、右側を無表情に抑えた、奇妙な笑い方。
ぎりと啼いたのは少女の歯軋りか、それとも締め上げられる中山服の悲鳴か。
「あなたは、誰……ですか」
苦しげに呻く。肺腑が圧迫されて、練れる気も練れない。細まった視界の中でカーキ色の軍服が揺れた。
少女はチッと舌打ちし、哲生の青灰色の中山服を突き放す。
「柳君！」
円窓と金網に肩がぶつかり、水滴が飛び散った。哲生はけほりと小さく咽せて、カーキ色の少女を睨みつける。
「私は李文驊（リーウェンファ）、階級は中尉。航校2期卒」
ぶっきらぼうに言葉を垂れ流す。きっと冷たく目を細め、口を真一文字に結ぶ。
文驊（ウェンファ）はその堅苦しい制帽を正した。
「では、あなたは誰ですか。小西（くそったれめ）??」